

ニキータ・ミハルコフ監督

ヴァーリヤ!

愛の素顔

1983年モスクワ国際映画祭
国際映画批評家大賞

БЕЗ СВИДЕТЕЛЕЙ

出演 伊リーナ・クプチェンコ、ミハイル・ウリヤノフ

ひとつの愛へたどりつくまでに
人はどこまで試されるのだろうか

2月下旬よりロードショー

CINE VIVANT

シネ・ヴィヴァン・六本木

特別鑑賞券 1,200円

※当日一般1,500円、学生1,300円のところ

※当劇場、都内各プレイガイドにて発売中

●上映時間

※入替制につき満員の時は別の回をご利用下さい

●自由席定員制・入替制



日・祝のみ	連	日	金・土のみ
11:00	1:40	4:20	7:00 9:40 夜 11:40

シナリオ ニキータ・ミハルコフ、ソフヤ・ウロコフ、エワラミ・スツルツカ、ラ
撮影 ハーヴェイ・ベシラ 美術 アレクサンデル・バシキン、イーゴリ・カール
ソレトモ、イェルゲイ・1983年製作 カラー、スタンダード・タイム 95分
提供 ソ連映画輸出公団、国際シネマ・イン・アメリカ

〒106 東京都港区六本木3-10-1
TEL 03-3433-6961

解説——「機械じかけのピアノのための未完成の戯曲」(77)の公開以来、端正な映像美と演劇的なドラマ構成に定評のあるニキータ・ミハルコフ監督の最新作。物語は離婚後9年目のある夜、中年の男が別れた女のアパートを訪ねてくるところから始まる。二人の過去、現在、そして未来、息子のこと、再婚のことが語られる。室内における二人の男女だけによって、愛と憎しみの葛藤がゆるやかにまた激しく劇的に展開されるすさまじい一夜。緻密に計算され演出された光と音のみごとなコンビネーションが、この人間観察に徹したドラマの奥行きを深めている。「ヴァーリヤ」とは、女の現在の恋人の名前である。撮影のパーヴェル・レーベシエフ、音楽のエドゥアルド・アルテミエフ、美術のアレクサンドル・アダバシヤンらは、ミハルコフ作品の常連スタッフで、ソ連映画の新しい魅力を創造する若い世代として注目されている。ミハイル・ウリヤノフは、舞台、映画、テレビの第一線で活躍する俳優。日本では「カラマーゾフの兄弟」「帰郷」などで知られている。イリーナ・クプチェンコは、「貴族の巢」のリーザ役、「ワーニヤ伯父さん」のソーニヤ役で、みずみずしい情感あふれる演技を見せた。監督のニキータ・ミハルコフは、今やソ連映画界きっての俊才で、抒情的で流麗な映像美が国際的に高く評価されている。1945年生まれ。兄は「貴族の巢」「ワーニヤ伯父さん」のアレクセイ・ミハルコフなど、祖父、曾祖父の代から芸術一家であった。監督デビュー作は「光と影のバラード」(74)。以後「愛の奴隷」(76)、「機械じかけの……」(77)、「オブローモフの生涯より」(79)、「絆」(82)などを発表。また俳優としても活躍している。

ミハルコフ

監督の

最高傑作

「ヴァーリヤ！」は
’83年モスクワ映画祭の
ベスト作品である。
チェーホフとゴーリキーの
伝統をみごとに受けついで
心理映画の傑作だ。

——アメリカ「ヴァラエティ」誌

【スタッフ】

監督=ニキータ・ミハルコフ

脚本=ニキータ・ミハルコフ

ソフィヤ・プロコフィエワ

ラミス・ファタリエフ

(ソフィヤ・プロコフィエワの

戯曲「目撃者なしの対話」の

モチーフより)

撮影=パーヴェル・レーベシエフ

美術=アレクサンドル・アダバシヤン

イーゴリ・マカーロフ

アレクサンドル・サムレキン

音楽=エドゥアルド・アルテミエフ

【キャスト】

彼女=イリーナ・クプチェンコ

彼(彼女の前夫)=ミハイル・ウリヤノフ

ソビエト・モスフィルム1983年製作

カラー・スタンダード 1時間35分

提供=ソ連映画輸出入公団

国際シネマ・ライブラリー



“一言でいえば
女性への謝罪の映画だ”
——ニキータ・ミハルコフ

私はこのドラマを舞台と映画と両方でやりたかった。舞台では映画的に、映画では演劇的に、と考えていた。「演劇的に」といったけれども、自然抜きで、人間だけを観察したかったのである。私は外部の状況が一度も出てこなくても、その登場人物がどんな人間かわかるような映画が作れると信じている。この映画は、一言でいうと女性への謝罪の映画である。男性はいかに自分の活動が大切であるか証明しようとしても、生命を生む女性にはかなわない。女性の方が人生にたいする責任感が大きい。この映画で、女性の恋人ヴァーリヤは画面に出さなかった。ヴァーリヤは彼女にとって、公正さの象徴のようなものであったからだ。